日本一統志

七十二ノ二

三十六

862
160

類
號
册
36

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

日本一統志巻第七十

同録

一 正国方ハ波阜ニ三千ヲ加勢ヲ事

附三城謀清洲城扱ヲ村宗ヲ悪ヲ事

并三城急ヲ清洲ヲ欲責ニ処ヲ得ヲ近ハ諫云ヲ事

一 上方騒動ハ依ヲ代也城ハ関東ニ注進ヲ事

附細川家妻子ヲ大変ヲ来ヲ具驚憤ヲ事

并沈田輝政内府ハト大名中ヲ斗ヲ人ニ教ヲ事

福原達夫氏寄贈本

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館

特3 —1

日本一統志巻第七十

石田方ヶ波阜城ヨリ三千ヶ加勢きス事

附三成諫清洲城扱事村宗た恵をきス事

并三成怠ヶ清洲を欲責ニト処潟た迎ホ諫

云ヶ事

去程ハ波阜黄門乃両家老本造た恵佐百ヶ誠

所る於二条ニ諫善説僧正ヲ密談し波阜ヨリ立

帰ヶ場員を踏ミし見ヶこの云を百寿三成

當城ヨリ来りけり延年ハ誰ま波社ヲ密ハ尓ニ

台黄門秀信へ出一向ニ和セヽ処出頭ヶ者云ヨリ遣使

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用

あらく其面くけ出を告しかハ秀信を始出ス人
ぞも立破し其間御謀文を拵之しらく作和山城中
からく弱速を究メ今更ハ格乃敵對ハ比無れり
以て外の企外ぞ密談乃者云ハ秀信か使を立
てよ所きハまハ各も足悟しけ上ハ不及不留に
思若なるからも雖思捨三ヶ國乃謀こゝ深セ強ひ御
運乃三ヶよぞ足より一向秀信乃人次第にいて
ハふこ持こうてくハり
然ハ石田方か籠城乃援兵ぞ号し加勢の大將
分にハ櫻原彦太郎厨同左京河瀬左馬外同十

左史を傳ひ候ぞし物ハ赤尾四郎兵衛白井孫
左史碩郎平三郎應ゝ乃足の士共を付し所三千
余人付し走し波阜の麓端龍寺山に三ヶ所乃
先を構へ秀信乃籠城乃藝國ぞなす石田方
にハ急角波阜ぞ清洲の両城を付へ充かゝむき
ハ実東か内府公方一打て登云中ゝ上方へ遁らん
事思ひも号ら以ぞ謀りしハお話かれりハ
軍死之
波阜へ分ケし三千乃勢を実ケ原ハ向ケゝて
実東方乃傳三備四傳ハ可破ものを秀信

を策し故物迷乃ん小出し並てり大事乃
士ハ抓策を搖簾ニ居ル勇猛れ乃きハ不
能成ス事ハ宜ク
然ハ居列清洲乃城ハ福島左衛門定正別居城ニ而
留る居ハ正別秘藏の勇士大将宮左衛門長行津田
同幡守信乃を殘し並ケリ此城を石田方ニ最度
思へ共正則事内府公御手ニ属し実東ニ下向
し敵味方乃吾雑計故如何せん哉実義遠之
しか三成急度案し出し其人分ニ抱並し事村
宗左衛門を呼出し其方ハ先年大将宮左衛門

一所ニ本村常陸外方ニ於て心易紀挨拶れりしと
安しかた格ク哉問ニ宗左衛門兼り成程其通りニ
御申て大将哉ハ兄弟同所ニ中台朝鮮陣中れと
ハ別しとて手ニ命を掛て意志仕て常陸外切
腹且浮一所ニ身上を拵ニ得ル某ハ御外抱ニ依て
此方ニ居り宮左衛門ハ正別ニ於ケ呼出ニ以ハ第事
大将公御せにいふしと申兼り中ニ哉中故三成欲
然哉しとて清洲城ニ手ニ噺しとて所てり早く
其方清洲ニ与ニ大将哉ニ談合し秀頼の誕意
れきハ當分かしの内城を此方ニ貸へ正別も

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

砲分いたし拾れしゆゑ十三百両ハ我が閑情之文
和ニ相似云請立し越しの料ニ十上千両もあるゝ
ゝいく一両宛もお渡し一日の内ニお渡し浮城
出御用ニ可立ゆゑの道言故本村ニ足ゝ士れき
ゆゑも立極津義なるニ生き故真志ニ兼引し
然らハ早馬ニ乞ゝ道し千両ハ安く持ちませ
ん随分城内ニ行日を急速ニ明ヶ渡し可ゝ中
ゆゑく一歌を上ヶ走帰りよし大金れから
清洲の城ニ明ヶ渡ハ千や二千ニ金ハ不可惜
ゆゑく又千両渡しハきハ急御家ニ清洲ニ着しニ

大御如お遠ゆりしハ
大清宇太郎ハ本村ニ立帰ニ吾國中ニ人を出シ
弓鉄炮ニ功者何らハ九月迄金五両宛ニて可
頼ゆゑ鍋也し本当山家ニも人を走らせ撰人ニ
弓鉄炮達者成ニ者何らハ可頼ゆゑ同鍋也し
ハきハ其ニハ因吉山家金銀拂座し一年立ち
ゆゑも一両の金を可持拾れく依てヤレ東ニ技持
ゆゑく跡技持斗ニて行しニ足ハ珍数大金ニ
雇やゆゑく我も〳〵ゆゑ三日四日ニ内ニ弓ニ者
三百人鉄炮打四百人走集りハきハ城中ニ呼

入々口々へ勢を増し望国成る望メ之けせけ
清洲留る居かゝらの者五十人鉄炮足軽品三十
人ありし故孫の外兎角異かく万一敵なと寄
る事何らハ落城せへし望口説し処ゟ石田の
新木村ゟ意志ゆへ城ゟ用ム丈夫ハ城しと
悦ひハる
然る処へ木村宗左衛門千両の金を持来し是々
宗左衛門如ハ此望思へ居舞金を出し是
り望渡ゝを望く望請えて金をハ異へ仕舞
入まゝ扨て其後しけ為内のせ話分ニハ寛く望

退留せよ望云故木村内々まゝ家ゟ長ひ早く城
を明ケよ大方今晩ゟ明早天ハ城更えハ或三千も
可来ル丈きハ左様ハ有金尺ハ引立から渡すから
為ゟ合ゝものゟ大清望いへハ宗左衛門なく辛くと
お気ひけ大清ゟ家のせひより宗左衛門其方ゟ智
恵なれしゟ出ぬし明る城ハけ急ハ為る事
余所を実義せよ望云木村殿立其方ハ悪ひ
癖らくむかしから閑まゝ時分望いへハおなけ
とかふ無ハふれし望云へハ大清気ひれから
其方ハ昔から悪るひ癖らく閑まゝ居望けへ

云へハ仕損しをしらく手持を失ふおぼけれ
しぞ云故宗左馬ふ寛を立らく来ゟ何を
は臣仕損せし様大事の使ハ撰きらく朝鮮国
さけへ仕様んしハせぬ朱村宗左馬之甚方ハ
何ぞやら碎く振りしらく事を問ゟぬハ託是来
ぬぞハ云ハせぬサアハ開らハぞ責しかハ大清宮左馬
後を抱へらく可笑しかり石田ゟ撰人ハ智恵乃
れん甚方ハ誰ゟ撰り武者ゟコリヤ十城ハ誰城ぞ
福嶋左馬連正則居城京勝退治乃跡哲ハ家
康公を思ひ乃出哲上方向の扨騒いゟれ家変ゟ

出来ん誰日本ハ知らぬ者れし唐からも実極名
を残しらく大清宮左馬行長ハ城を執ゟ而ゟ新
来者乃来を男ぞ思ひ込こと正則ゟ服力ハ天服通
乃雪将之来きひ百家ハ清有ら誰家来ら
雪士乃魂れん誰子云乃如く信り扨ハ事ゆらく
城をゟせぞハ馬廉しし正則ゟ正年判取来ゟ
ぞらハ判繼ぞ引合ハ遠ハ後しもせふれらぬ
誰云ふらく一生一代大ふれらぬ乃親方様意志
早髪ハ戯けをいふらくも生しらく帰スゟれんほ
乃祀走早く帰きしぞ匂らく朱村ハ忙然扨

此戯ゟて敷ひ生ゟ不及是能ニ然らハ其金子を
返せ持来せんぞいへハ大将ハ起り將ゟ笑ゟ中ゟ
ふハ是家た恵智恵ゟれ心ぞハ其事よ其方
持来ゟ金子所存台せらく千三百両かしも某私
欲ふせ以ら鉄炮足ゟ汚ふ故七百人抱へ生り
定ゟて城を借ふ心の明ケ中心の空ふゝ嚴ゟ
ひらしぞ押寄ふハ如定よ持ことを右の金子
ふゝ召抱へ生ふ手ゟきの精兵対出しお出
し城際返も寄せぬ処ハ大将ゟ智恵は方ハ智恵
ゟり其方ハ智恵れし是三成ゟ中よ智恵れく

しゝく大義ゟ計略ハ中汚ハ七刀ふ焼きれく弓ふ
弦れ紀よりも尚急入生る恩人ふ空知ひ出せハ
家た恵召まるゝ若堂上下三十人斗お入らん空
生ふ処を大将お身ゟ下知ゟ台ゟ柴の下かも底
間ゟ存ゟ障子戸板雑蹴放せハ弓鉄炮百挺余
ハらしぞ立乗ふ大将小高紀所ゟ出上り家た
恵ゟし急ひハ持ふもの其方骸ハ運根ゟ切
口ふ等しく城処を某空ふゝ扣つゝそふハ
汚せぬ志かしハ且出ふ空出らしやと先を
引志ゟり大盖切まハふ及是ゟ家た恵大死

ハ江急ぎり案りむこんぎ宮大馬ニ乗ハ奇驚
ぎ盗賊乃侍校をし生れ追剥ハ道路に立て
人を剥く其方ハ其の上にて千三百両ぬり
そしくおぎ給しや此処にこぎハ
帰り免
扨こぎ石田治部少輔本村家たる馬ハ大清にて方便
千三百両の金子を只ら取城をも不明度すれ
憤り押寄て可責落ぎ云ハるを消た迫
を始ぎして蒲生備中薛兵庫口を拵へて
三城を諫めハる根本にも清洲の大清を責て

又二万三百乃手負お死出来へし伏見一ヶ所乃城責
に手負お死二万近く人検しに路分沸く様に思
召ふても走着ぬ内ハ味方も味方ぎ頼かし如し
十三万余の熱着到冊浮日三万余と云ふ向又伏見乃手
負お死を引て見ま八五万余ハ此死ぬ上八
万ぬるく数を清洲にて二万も検しに早意
合戦江心元なるけ方て千三百両を以て寄手の
勢一人死対倒お倒しにても一日一夜に八城中乃
一人ハ十二人死乃寄手を亡七百人の弓鉄炮にて
八八千四百人乃寄手滅し中に有十日清責にて

一騎一人ニ殘ニ云ヘ下中ニ達ニ候ヲ江南ヨリ之諫メ
ハ其ハ三成遠嘘を申れしニ然ハ忠の者ハ入ニ
燒立ニ出ニ忠を入ニ事七月下旬ヨリ八月中旬迄
十一度之しニ大濟宮ニ先年甲州遠波ニ内
黒駒才助出ニ云し奇代ノ忠の名人を召抱ヘ並
しニ大濟元来主従ノ法備ハ易常ニ暮せし故
才助も何方へもニ行しニ付ニ臣も宮ニ奉ニ
居ニ故石田方ヨリの忠ヲ出ス事十一度一
度しニ一人二人宛討ニ故名代の忠の首十一
迄異東へ八月下旬ヨリ下せし処九月朔日上方

御出馬ノ砌右首十一を道神明下ニ掛並し家
康公御説ニ城跡の外御悦ニ付ニ立ニ極御機嫌
能かりし出ニ候ヨリ付臣町を行江戸ニ居りニ故
枚舎四郎左衛門勝重（後伊賀守従四位侍従）愛明ニ之の物
祝ニ城ニを能く為しニ故ヶ根ニ掛並御ハ
雪ノ奉りし出ニ
異ヶ原御利運ハ清洲城を石田方ヨリ石渡しニ関
東皆ノ足濁り出ニ波阜の城を責ニ居し
出ニ故浮日ノ大合戦ハ大利をよ得しゆへ
家康公関ヶ原の御仕ヘ出ッまハ御意ニ異ヶ原

乃勝利は大濟守憲清例にてのかくり故全く
利を得し之大濟めは自随落成楠正成れり
然れとも御賞更なりし然し
上方依騒動に伏見か実東に注進之事
附細川家妻子之大変中来り右無驚憤
甚事
英池田輝政内府公に大名中を計忠信者
数之事
朝て七月十二日之日付にて伏見御城代居
青木憲元忠内度深沈右憲松平主殿内松平

五左憲連判にて上方騒動乃御左右中上伏見へハ
来タ早せ不中ゝ得云一当日中にハ慥に早せ下中に
松乃丸の若狭か将をハ下立出ス為急之御注進
れり廿三日宣にも少し下りて云着すけ其ハ
家康公にハ小山に御本陣をと居処に右御注進三
人来る御小人両人は上方か来り一人ハ江戸表か
お添仕し上方か来り御小人之内一人途中より
お加ゝて漸落着ゝ然の事にて御所へ出
本多右勝御披露れり何きも是へしたまへ
れる地師をせしよれ右勝中付て増扶持を

知らせよ聖の作にて各御坪乃内に其土
仕し三河御代ゟ花師の者に其跡技持常
くゝ乃通り道中技持ゟ道中路用の外に其
下ゝ事徳川家乃習之
御饗美ゝ増技持聖ゝ云ハ僅乃中之十日にて
も其日にても道中乃日数乃分を別にて
岡崎御領乃直ゟ如此五ヶ國に成りても七ヶ
國乃出ゝを御癖にて如斯と仰有く
通ら下ゝ之
同廿四日朝出ゝ御膳最中ゝ処に伏見ゟ御花師

立来一人ハ道中にて其故中神奈川に止立神
奈川乃一人為御人に戸返ゟ具し其誠中ゝ也
にて一人ハ着仕し戸町奉行彦坂小形部方
より御人ゟ一人道中ゝ病家実ゝ
中上ゝ御膳まゞ召上ゝ家御着を捨花師の
者坪乃内に聖ゝ召御立掛り要細乃様子
御尋乃処ハ者ハ十八日夜中伏見を其立ゝ着名
様乃御事御来きひ下ゝ思召ゝ故御注進中上ゝ
調濟如賀ゟ晩何云いゝ御供仕実東ゝ通
路中ゝ難成ゝ有ゝ晩中ニ禁裡に奉入筈の中

合かゝて御供いたしゝむ居久五郎是能城中
かゝて父ゝ一所に討死ゝ中切ゝを父謀りて只
一人御跡ゟ乃下し中ゟ付上ハ御事きのゝ不可
ゝ城ハ可城程ハ持こゝへ中ゝへゝも早竟ハ
落城と思ゝ後に此の義れり家原公御ゟの
成然ハ心易し城乃望めハ如何様に構ゝ御
問ゝ様ハ鹿御の者中上ゝハ橋を引危く本戸を
打て敵押寄ゝ弓鉄炮にて対せくめ打せ
くめ任分持こゝへ中ゝ不曾れり此中上しを
と為す南三室落城近江に至り思切て敵成

待にハたつし生ゝ橋をも能く掛直し寄し
本戸をも開ひてこ其敵を同乃下に見て出
其勇勢一際可勝を左平乃者云ゟ常乃勇と
ハ遠ゝよれ扨て鍋鶴を弱速をふ遠足弱
此ゝもを能其行目呉し事ゟ付度の悪情難
忘忝しく此くり遠しく御悦も御尤れり
いかし思ゝ御両度乃鹿御をハ御人を上席ゝ
江戸ゟ御遠しと城治江戸ニ体足と留ゝ故御体
中にて上方ヶ程近強乱此ハふなゝ処同月廿三日
乃夜に入て大坂ゟ細川越中守忠興乃方ゟ大変

告来告打在池田三左衛門輝政と明将木五百石
門口乃御矢倉乃評定内談して輝政只一人別に
乃方へ弟りと居て如何にも息きおもひしと云顔色を極憤
出て不審に思ひつゝかけいは武志乃中故輝政と尋し
ものり上方乃屋敷へ武術を来乃城法にてへし
かく何桔の大変出来ると申すけれと云ひし程に風説ありせし
乃注益乃雑説陣中にて御法度故ありしめ其も
いなれは此段お指差しなき者乃類色不尋常有
方御息方お語る事も承る何桔の事なとくも案
ひきさる度乃候様なのみ下秘中かもならぬいか

にしと思ひと問ひまいは越中守流れて涙如滝[illegible]を
逢暑を握りして怒思ひて中にたんと云後云語せず
大変たる無前早な切りとて候様輝政驚きなすかね
側に寄り居子細いくのみとまきて怨流石乃左
無累年比類乃かと思ひを入れし身に語へと情ある
輿方子供三人ありかし自害の事をと参しかいけ
在張の[illegible]乱し揃云事も雑説径乃義とし
ひかしやうなるまく安細に揃語るとは怒骨髄
に徹し何ときの世にかくたる事るに明智滅
亡乃将と日本広しといへとも丈夫たる無よりか[illegible]

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

に丁頼親教もれく種々乃憂同に遊ひ当年
迄ハ家康公一度乃御憐愍を以て家住ハ
不便千万れ事ハ悴義に責て十歳を越し姫
ハ百連丁中処御八歳に成る陣中へ言具
事今更残念ニ中ハ勇士乃為まの恐ものの
別きを欲く思ふ丁と思ふ八策乃悴ケ様に成り
を魂に御激しけん陣場へ発出合戦乃見度
見習ハ候しとハ手前に軍ハ成ハ申し
首途乃神に其かつて年り生かりし我眼自
止立しハいかれ事一業不職に小ニ涙玉を

貴化愁傷声を示出武士乃歌きハ為方れし是
を上夢沈田三左衛門もに落涙を催し言語
同所乃大変時背憤ハ立極し定て一両日
ニ内に御事陣ハも大変中来ふへし扨ハ
ニこ当もれく中せしハ雑説にてハれかりし扨を
先ハ御法れし当輝政ハ越中守の新を
守り豊ゑて神を扣へ先以上方ニ実東と
東西二ツに分き敵味方眼前をり然ハ此度
内府公御供いたし発りし其ふ大小名敵
も丁ゑ味方も出来んか妻子を上方に握り

后々上ハ内府公を捨て聖りゝけし上方一味聖ゝお
思へ不于時忠興光彼乃心中ハ如何聖ゝ聞ふ越中
守臂を張て眼を瞻らし輝政をハタト睨ミ
見ハ城ゝ事を宣ふへ御妻子をと教しハ
兼て慥乃事定て父幽斎も小哲聖ゝ云年ハ
青ゝ聖り来を始見乃家来ハ皆笑来へ下り
聖りと押青ゝけし討死ハ慥然る時ハ細川越中ゝ
ハ天上天下只一人何も頼乃れし某上方をハうゝ
めしく出替なゝへ仕し池田彼ハ内府公乃御縁
族なるゝ及け臣ニ御別心ハもゝ御左様の事ハも

ゝけし他門ハ尚変心せ屋し諏訪ハ幡も巡説ゝ
けし忠興をおそ聖ゝ奥意をと寛ゝへいかゝ聖ゝ
誥掛りしかハ輝政完尓聖ゝ笑ひ仰ハや丁及日
本國中ニ隠徳門乃家康聟聖ゝ中せハ永不肖
なかゝ人かはしハきゝも輝政いかゝ別心を変
ん御光彼心お知きせり先ゝ忠興輝政両人ハ
義心全験て内府公方定か大名中の才一先立
軍を心を引見内諸ゝ東西を分ケ立んと
支か両人談合ゝ福島左衛門正則の方へ
余荒増しの挨拶輝政と申ハ御亭主ハいかゝ

思召れし中ゟ上方向ハ風説遥々れり又乱世に
も可成ゟ計ん元世ハ中にゝ聖ゟ中ハまハ正則要
て御家ひ何しに誰ゟ乱し可申能ふ法也ふいつ
れ大乱に成て世ゟの様様を改メ天下ハ士民
ハ帝の方へ行ケ申ゝいく者ゝ様も一國の主にも
成可申今の分にてハ聖ゟちゝ自然の此方とも
れ聖も家かくらく小ニ而に深世ふかさし
其間時代ハ治り様ゟ生治メにて諸文の業我文
云叮嚀にて家墨紙迄急を入しに判形ハ
れ心聖同し事いつれ乱ゟかゝ乱き立れ

て治ふ聖其後ハ末代道具ハ古平れらん聖
世ハ評聖なふ聖正則もんに思ふ事をお明ケ
て語りしかハ太興も輝政も完ゟ聖笑つて
同聖同を思合明日ハ余律表ハ大評定聖
其後可相法意聖て両人ハ上ゟ帰ハ家載中守
ハ直に陣所ゟ帰ハ家ゟ輝政ハ家康公御身
ハ上を家きし何聖れ大名中ハ安吾を見
深し此後の工夫頼りれまハ黒田長政ゟ見舞
て世ゟハ此にれれらへて上方乱ハ時ハ如何
聖の心底を安請又浅野幸長ハ陣所ゟ行右

之通案而れから窺しに是も内府に志を寄
ふ様にしら内にも大に悦ひ扨ハ只今にも上方
より何程乃大変中来りとも細川福島黒田
洪郎ハ内府方迄ゆくも二人れ従へられり藤堂
高虎も去年已来乃忠臣へ然ハ誓へ大乱に及
ふゆくも中々御亡運ゆく近ハふと思ゆく人乃内に
咲を倉庫所へ帰きハ世乃刧にも御かり
ハふ

旅陣所ニ湯漬を食し供御も不速只
一人内府公御本陣へ矢ゝ弁行事政を

呼出し密談し家康公御所へ両人斗
上出公ゆく三人御扨談夜明ケに立ふ何事の
御お談ゆく言事を知ふ者れし計臣の輝
政乃実義ハ弟の和御不曾の扨へ云れり
小山御陣中早速御立騒ふと成しとく大小
名御手に属し実ケ原大利は強し事
池田輝政丹誠乃働ゆくゑとく御褒美の臣
百万石乃大永ゆく輝政出世ゑふ事世間
おとくハ只御聟故ゆく斗思ひしか家康公
御操中々御一族ゆくとり云大功法之元中へ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

接群乃御加増ゑゑ事れし此時臣乃御
襲美れり此ハ弁伊豆政かとりし
此之

然ハ上杉景勝此ハ大手口乃御一戰乃定メハ七月
六五日己ノ刻此軍使をゝ立合しかハ上杉景勝ハ
此一人西方院此石口案女をゝ臣連携史を案
内此しゝ注来れ紀山中を通り今津へ充て
逆し兼て始掛しゝ待更しかハ八千乃始成
卒しゝ背負這坂乃御を越ス
此御ハ歩行立乃者両手を寄て這上る故

這坂此云玉極乃渡沿之八千乃京勝旗
本悪く歩行立かゝ馬也一里限の始至の
城此立而白引也し立並せり始至堂成
ほか當て長沼か陣充此いへ云敵乃方ハ
ふゝ女ハ常乃注来れ紀故れり味方も来
ゝ乃上杉始ハ此まゝ京勝忠勤て旗本成
ゝ立し此ハ不和し此之是十死一生の心掛
し重乃奇兵之

七月六四日乃早天本庄越前る繁長奇兵乃
横鉄勝負究メ乃大将此ゝ居りしか此一人密ハ

京勝乃旗本ニ来ルヲ中ハ家ハ夜中来ル出し並ニ
恐の者走帰ルヲ告ルハ今日宇都宮ニ江戸中納言
秀忠公乃着陣ニ兼リテ於ル徳川陣中の御法ニ
家康公御着陣を待受ルヲ秀忠公旗成ル国原
へと進ニ於ル白川表ニ徳川ハ先手一番合戦を始メ
失合ヲ受テ答之然きハ秀忠公ハ明ヲ五日ニ国原
泊リ家康公ハ宇都宮ニ御迎中ニ於六日秀忠
公ニ白川乃城ニ押詰白坂を越ル家康公
ニ境乃明神ニ御本陣をとる立義慥ニ安屋ニ
帰リニ於六日乃夜乃ほのし明ケ方山中を押出シ

強ひて御屋形ニハ八千乃御旗本を以て兼ル御
足悟乃十死一生乃勝負をとらん掛一戦の内ニ御本
意をすらず遂ニ敵乃先手ニ出しも御家きひ而
ありニ荒されしハ大国伊馬守清合中ニ其上ハ何方
ニ至ラ然も繁長ノ三家の続く生けハ一人ニ至も
強しゆ為ありし屋形の御仕合ハ八万の味方一人ニ
そも生ニ足悟乃者ハ御法望ニ為一人死を寃メニ敵
ニハ十人の兵雑向ニ中ニ入ハ五十万六十万乃敵ハ
追崩しゆ御人事不可手為ニ中ハ其ハ京勝
欲然ニしてく家康の旗成追崩しおそらん事

謙信ハ以来真乃奇兵乃拠ハしらく日本ハ計侍
立知ル者れし左斗の武田法性院ハ諸門
中将ニ級軍ありし拘ハ家康公智謀深しといへ
云何ニ其ニ信云乃神機妙算ハ不及抜れし此度
ハらく日本乃武士云乃生所を不取ハ思ひ寃し
侍立れまハ勝利ハ十分ハ為ニ恐ハ繁長
を上御内府公境の明神迫ハ動座を待構へし
其思しハまし
新らく七月廿四日家康公辰刻小山を御立あらせ
故実ハ御動座ニハく旗本充一勢ハ探出し御者

例ニ御旗ニ出ル成侍請ニ武者押今其ハ
勾ル処ハ早打乃飛脚馬ハ飛下りれ如ク上方乃
大変五畿内西国中国ハ残御敵ハ成ニ大坂
集ル軍勢ハ万既ハ伏見ハ寄ハ来ニハ大音ハ呼り
しハ簾忽千万此ハ成ニ一度ハ御本陣の堅立
事下ハ居ル者ハ立ニ走り馬上ニ者ハ倒き
落立ニ来ル事ハ特ニ見り同もと思ぬ動物上を
下へ出ニ返しハる
此飛脚伏見ハ来りし書しハるり之両度
まらく御本陣ハ来りしハ随分密ハ来ハ中

上ゟ井伊本多ハ元ニ中ゟ卒ニ不可
諸陣中ハ騒動ニ成ル故ニ伏見城中
ゟ居内度中ニ故御僧代ハ小人元れまハ
かしも御為ニ成ル故ニ城ニ立ヲハ両度迄ハ一向
ニ御本陣中ニハ不為知しハ此故れり此度ハ
我師ニ宮治の上林ゟ一族ニも両人登座
ニ分々馬ニて下り如斯注進せし事ハ上林
峯順将又兵衛ヲ父峯順伏見ニ入城する
事を達て留ても台点せ次篭城せし
かハ寺台多く評義し兎角関東ニ注進

せハ家康公命津を捨て先ヲ上方ニ御登
ゟ又郡の大名元中登ゟ伏見も落城せ
満したるまハ上林も汚恙城を出て助命
ゐるべし此の不留ニて早打を以て告
上ゟ故かしも汚遠急上方大変ハ騒動を
呼り散らし兎ニ

依て同月元走り上らく静りゝへ百五十里先にての
事れり此今変元ニてハ汚擬ニ声を汁りに
制せまニも安入まハ出来ニ皆口々に其百五十里
ゟ大事れり変ハ我々汁ニて大事れり此も心

易し百五十里先乃京伏見大坂を始めしく
主人方乃妻子も上方にお持ちなき南部三室是ハ
殺はまハ生ならまゝ心ゆゑ已くの臆病の不曾
かゝ御陣中の障りも構ひ御持ち混雜に成らく
所謂乃行列も悉く雜談し多り
家康公ハ此御地両度迄御耳に入りしに注進
ありまハたのミ御動物もれし必ゑ云へ云大名云乃
不曾家中々乃士卒乃妻子皆上方にあるを
ありまハ早竟此合戰利運ハかゝし故軍ハかし
御所ゆゑ否不可立事ゆゑの御遠慮ありしかハ

此度御一身を以て早く騎馬乃達者を御撰み
上城江戸中納言秀忠公御宇都宮乃御陣ゟ御書
見刻小山ゟ御帰ありて一同に御安宮を下ゟ皮との
義之秀忠公ハ常々ハかゝ寛葉城御生まと思へ
奉りしかハ此度乃御案ゟ是りしハ御案ゟ能事大
形ありて以御馬を引立て間に御自筆を以て右因
原に陣立て不榊原式部右輔方ゟ御書通ありて
関東黒ゆゑ云し名馬を強かれてり百ゑゆゑ宮
御供乃騎馬御師に續しハ十三騎ありしかとまも
く家自柳中上に者れし小山迄ハ十八里乃処ゆ

名馬ニハ中ニ行カレシ事四日甲ノ上刻ニ御家ト成同晨
寅ノ下刻ニ小山ニ御着ト成ル歩行の御供ハ翌日昼
頃ニ来着せし也十三騎乃元も大方夜明ニ候
追日奉りし也
白川表一ノ先榊原康政も秀忠公御書拝見し
見刻引立し処ニ田原ノ宮新宮の名人馬の混雑
見て敵乃追掛る如く言語同所の体康政ニ其
中を乗り破りし小山ニ乗自しに及ぐ乃評判
上方勢ハ三十万余ニ及ぐ早朝根を押破りて白
戸表ノ夜元追寄せしり石田三成大将ニ天下

悉く敵ニ成ル也口々ニ評し欠走りハ家ハ忙然
呆ニ家騒動也
慶長御年譜
関元記
東西治乱記
右ニ呉本ニ記しハ家ハ御臣ニ黄門秀忠公
亦五日ニ晩宮新宮引拂静ニ也小山ニ御退去
の也れり大城ニ呉説也可云亦五日於葛籠ヶ
原双方矢合也の軍使ニ亦三日定也
御臣景勝ニ軍中軍奉行松原常陸ニ

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

方ゟ引立巳午の刻ゟ陣構せしめける右の
次第を早馬二騎白川口ゟ諸方へ廻し丈介注發
乃馬を出し速に前々に告し故上杉勢追
討に不進けると

家康公ハ老台すへし江戸中納言秀忠公
宇都宮を廿五日ゟ引拂ふ成ゝへハ一乃先太田
原に陣取しに榊原式部大輔廿五日ゟ
夜中ならくハ陣拂仕かをし小山か宇都宮
宇都宮か大田原迄乃陣く云決しかゝく合
日限抜さ程しに速く城事明白じ然者

此度乃上杉勢ハ白川口乃矢台まで三兵の台
ゟ敵台六り程も備ふ出しへとも其外一度
合戦乃橋鋒を入ふ亭兵乃分三里四里乃に
皆しかハ速川皆一つ先ゟ中ふおよ秀
忠公乃御旗本ふ随く作陣半追打ふ下よお
下す勢ハ十万乃勢ふ及も残りおふおれ江
ふくものなり危見下すやもと下云ッ然る処
路に移きし秀忠公乃御手早く小山ゟ御馬
を出し候ふ何事ふも稲くハ動揺のなく候
榊原式部大輔も周章ふくめきし引立し

故勿論其外の元中和ゟ如くに迯立し事
當座ハ外ゟ悪まし〻いへ〻も早竟御
人数一騎一人換せ御ふ事家康公の御益
〻ハ御ゟ〻孫ゟ御大利をゟ恒し〻〻
其好御機嫌能く打こハ家康公御和ゟ康政
能出御物語ゟこと御笑ゟ成迯ゟ勝事ゟ〻
云ハ昔からふ及是紀にむくす〻斗思ひしか
家長五年七月廿四日ゟ康政ゟ迯斗勝迯とも
成ふ様〻〻ゟ仰〻恒ハ康政中上ふハ某ゟ迯勝より
又迯以ゟ御出来ゟ成〻何き程の大迯大驕也

已好ハ完早ゟ為ま〻ゟ中上しを本多中書
歌笑ゟ〻康政を一ノ先〻ゟ仰有ゟハ迯軍砲〻
や可申何云外ゟ不宜ゟ御れり〻中せしを
御ゟ〻成中書れらハ時迯其ふ負ゟ〻ゟふ
漢ゟ高祖迯元ゟ天下〻言成しらぬゟ〻御
笑ゟ成し〻〻

日本一統志巻七十終

日本一統志巻第七十一

目録

一 秀忠公并伊本多小山ヨリ走着事
附本多右勝一存中上ル事
并大久保彦左衛門正利大云中出ス事

一 内府公以御愛明ヲ大久保彦左衛門事
附君臣三人利害損益之御評議不落着セ事
并榊原康政右国原ヶ崇返し直云的中之事

日本一統志巻第七十一

秀忠公井伊本多寺小山ニ走着事

附本多太勝一好中上ル事

并大久保彦左衛門利大云中出ス事

新々江戸黄門秀忠公ニ早打ヲ走ル跡ヨリ下ニの

騒動ニ雖不静御所ニ御ニ諸元中ハ

酒井宮内少輔家頼　大久保彦左衛門尉大佐

大須賀出羽守大政　平岩主計仍親吉

牧野右馬允康成　本多豊好守康重

石川長門守康道　松平玄蕃仍家清

菅沼織部正定盈

徳川譜代の面々君の御大事は時々私の安慶
無へ兼御眼前に御出可申上所もれし又家康
公もと御出御祠も不忍ラ君臣御合入ミ御出
ふ忍ハ格れり寛仁太度の我君もけ臣ハ御当惑
の体ふ尊常即ち所に御鉄山の如く成ふ天下
御双の孟勇の上松家八万に及ふ大敵皆死出立
にて待掛出ふ所々と多臣御弓矢も来ム斗の事へ
御得出西國中國南海北陸一度に起て亦万云
云三十万云云所得の大敵強敵をハいかしらく交

を御ぬかまとく御運を下と聞ひ所々御工夫の御顔
多奉ふも御心中ゝ御苦労いか斗所々御譜代の
面々肩傷を吾ゝ担へ出ゝ然ふ処并伊兵部直
政鉾也の後にて御所に一事に出ゝ先ハ志
御ふる顔を洗しけら嬉しや先ヶ所一ヶ殆ハり
此ゝ下にと居出ふ処に江戸黄門秀太郎所々本多
太勝御一所位に揃き合ゝ御所に御通りと成て秀
太郎も水々所々と御しかし御小性持系の者を御傷
并伊兵政か半分とテし水硫の水を御所ら来
物を不ら御と召上しハ御馬上に御息を切ら御き

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

しも御覧之
家康公初て明日已来御覧之御顔多にて黄門一
生に御覧之早業れ多へし此義之聖家に能しハ
落合ハ苦労も薄く見る聖乃御云乃下か秀長
今御挨拶に歓軍此江戸をお越しけ迄も押
下りゝ風聖掛く御祈ゝ我御心元奉存異東
黒を三度深倒しゝ祖に深自ゝ聖仰に家康公
掛く榊原事をふ中越しか定て其方も失念
此家屋し如何引えゝへハ能しか若乃遠て白
川口に押詰ゝいくふ使千万討死せへし聖御意

を御聖ゝ成黄門御返言に私方かゝきて為大
方明朝ハ帰着可仕ゝ何時抜聖ゝ仰ゝ宿御祈に
よお詰し東條法印夜明ヶに祖近くはゆくと云
中上黄門御祈白御近寄ゝ成命也乃大変御お
請ゝ後如何落着仕ゝ引聖御聖ゝ成ゝ恒ハ内府
公御意御きハ〳〵事説乃請ゝしもお遠れし
骨肉乃者れらゝハ請合の節目ふ出来掛れり
け座の面ゝハ三河生立乃家康か手足式ハ節骨
乃如きか者云れきハ何成中にも不苦先ゝ御
当なり此家祈乃京勝聖一戦に可及ゝ然きた

京勝ハ戦ニ内ニハ上方乃大敵ニ東海道を
平押ニ下リ宮桜をゝ越てハ味方乃楯ハすす
へ仕切ニ成れし丈を難ハ我ハ持んし元ニ返し
上方衆を防かんハ於退ニハ家康ヶ弓矢京勝ヲ
思まゝ逃ヶ帰ふと笑ハんけ両我ハ中ニ難ハ
我御遠嗟けせ給ふ本多中書進ニ出ハ我抱て
中ハふハ京勝ハ死支度ハ兼ク生競へにハいゝ
死競ニハ負中ハ多ゝ忠勝ニ一万乃御衆を御
残し御所ニハ黄門ハ御同道ニ早ゝ江戸ヲ
可ニ為入来ハ返て京勝ハ一戦を覚け下中

来一万乃衆ニ於ニ白川表ニ討死仕ゝハ八万乃上松
勢二度乃合戦ハ難致程ニ打敗し下中ゝと云
遠慮ニ中上ゝ処御迎ニ御浩ニ至ふ御譜代乃小身
充て中ヶ秀太ハ自乃長柄大将大久保彦左衛
太教ハ本多中勢ハ捕太勝乃鳥帽子子ニ於て
殊て外意志れりしか太勝の中上しを笑て
押分ケ〳〵御所ニ進ニ出ハふ故御先手元の中老
所通ニ在りしか是彦左衛ニ其方ハ我の思
案乃如所ニハれ知れ扣へよ〳〵ハ止し処
彦左衛ニ腹を立て思案智謀ニ如能書ヶ

ゐて物ヶ腹脹ニ云ヶ其ヲ物ニ成喰る之ニ男乃腑ヶ塞
ゐて物云事も不自由ニ思ゆるまゝ已ニ鳥帽
子着せゝ祖ゐて年ゐ中書ヶ一ゐ宛もいふ斗
丈きも半分ハ寢云れりケ様の所ハ親子数約
智を貸しゐて男を搭けせまゝ思ふゝ出る
其点ニ止ふ此ニ遠急ニ行ひ其五日已ノ上刻矢
台此ニ定メ止ふニ悔ニ来る同所の皆乃頼自
一条面白ふれ以軍神乃血祭りをせぬからけ
様ニ軍ヶ止ミ其ふニ行ふ元来味方乃中の膳病
乃首を切て投出ス所の血祭り此ニ云て物ニ此ニ楮

子曲剛ヶ侍授しゝ信云の秘藏乃士云れきハ書
物ニ此ニ事をハ能く知りて遅ふ其ニ此ニ云なか
ら侍軍乃仍も肩も足袋同所ニ蹴立て進ミ出る
三河ノ譜代の元中ニ壽左衛門ニ当らぬ我信云乃
勇士ゐかりしヶハ十ヶ年家内府公伏見常詰
乃ノ大老乃随一故半年代りニ年来上方詰せ
し故都乃水ニ吾書夷ニ垢を取ふ此ニハ能く
云し近年ニ実東士も角トヶ取きて来遠者
ニ揉ふなり此ニ退て通ふせハ壽左衛門已ヶ強ニ思
ふゝ此ニ思ふんと即ち天正十八年の小条跡七刻

徳川領せし城々秀忠公関東御住居乃方ゟ嘉
左近ハ台ゟ御当りにか近くせし役務し上方の
者ゟ一度嘉ゟ計の男文字の行去を見てい
後乃溢き者本ゟ中書乃姫と諸是ゝと脊を
流しし若殿に某ゟ清り后清行との孔すや也
に一方人ゟ教せしも出るとを八教清ぬせし烏帽
子親を大切にせしに入出於勝之
内府宣ゟとゟかゝ誓へ嘉方乃幣を大勝に付きし
ともゝ添乃幣汁かゝ中く明日か標立柱子を見
てゟ上方大軍せし云に安怖しゝくのすれまい

必台く勝負仕かせしせの御意を蒙門江御安
と成大名中御味方とゟ中にいて清のみ御皆ハ不足ハゟ
清しせしとゟ候にいて恐大名危の内敵味方乃方剣更に
御分剣と成かく見ゟ故内府云小声にとゟ候ハ大
名乃面く上方に妻子ありきハ何去せしとゟ御家
きの停と嘉左近ゟ秀忠乃御姫ゟ返りゟ遊寿
是若殿くせし中上し於ハ御振向と成ゟ候嘉左
近御清し若ハ為印にゝ太書院ゟ大名去諸く
着在味方遊登かせし安くハ造作もなくにこそ
味方ハ成清心せし中にいて行婦かゝにお教し其人

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

数を一々某々いく人は澤山に法中を屈し御使
に壱た恵とお出否ぞ云ひ直に仕舞ふ事ぞ
理不尽ぞ城中方黄門御実と城を内府公要
振りに奴り面白ひ事を申掛かと壱た恵の遠
向を御立と城御使をと立し事を得ぐまても
壱た恵は自慢しく実ヶ原乃度ハ敵も分別の
出ぬ処を壱た恵の智恵を言ふを殺に其所の
智恵にしく軍に勝りて恵口ぞ事敵
中をもふ輝大に名振舞自合て場にくも申
教らしく故早意御憎ミ有て大名にも大身

にもふと城ぞ思へ出り勿論大名に成る人柄
にくハれ事ぞも今にしも知り下と申ぞ
余り小身にくて身上困窮仕ぞ得ぐ申上しか
内府公御実と城百万石立加賀守も言ふ事乃
れらぬ大口を云せて直ぐの奴に加増之壱た
恵の知りハ口の壱出しの高れり御実と城し
ぞ也

内府公御愛明ヲ大名保壱た恵を云御納
得て事

附右三人利害換並て御評義不落着事

英榊家康政右国家ゟ云ふ通シ也云的中ニ
事

新ニ云ふ長五年七月廿五日早天ゟ於小山御本陣
家康公御前ゟ何きも諸儀匹ニ城処ニ黄門
秀右衛門ハ次ニ結城宰相秀康ハ姫ニ走り
帰りニ御前ニ発出ふもあり御次ゟ和元中も
あり家康公思召ニ疾前ゟ種ニ乃不曾せると
いへ云大久保彦左衛門不計中出し生ふ推来
乃口上ハ外乃元中ハ彦左衛門ニ禮之極ニ斗なせ
しゟ家康公ハ万事伝云風を御慕ひと城下ニの

中事をも不和顔ニ御一分乃返向ニと城かし
宛様様を引遠御用と城ニ事平生乃御操る
り依て彦左衛門不曾常ニ我侍者ハ誰切
生ふ一ツ二ツ乃不曾ニ的を当ふ安定の一云
之極ニ思召ニいへ云大小名ニと伝出ニ御味方
下中御乃否て如何ニしらくも難究先ハ妻
子上方ニあまハ丈を打捨よもや家康味方と
ハ中御しハまハ御不曾ハ手ニ告乃勝負と御係ケ
立と城御叮嚀城ニ御生まと故列座の面ニ見え
を問せらふ内府公と伝出ハ梨ニ伴て下向し

阪々跡よりも走セ下ル大名人質の妻子を上方に
与最近上ハ早く帰し為登其子ハ徳川乃一族譜
代乃家人分七列乃手勢を以て宋根を丈夫
に持望メ上方責下らハ雖不白引請下防戦京
勝方をハ於宇都宮に支へ此方ハ軍をふ好上
杉勢掛て来らんを待防戦を当要ゝし日
数を経ハ其内に敵方来て戦し家康ハ居
て戦ふ乃横益ゝきハ経ハ味方乃勝利ゝ
成らん是完上乃工夫ゆり此ゝと仕出の処井伊直
政進ミ出ゝ上ハ御捉御むにハ未定へゝ候ゝも

第根を要害ゝしく三略を境同ゝと成上方勢
を防又奥方乃敵上杉勢をハ宇都宮にて御防
可ゝ此ハ御むて不むゝ中ハ扨にて御中ハ左右
乃時ハ敵ハ天下に満て廣く味方ハ七ヶ國斗を
守て狭し偽安く唐乃七列乃如くにもゝて一
方乃覇王ゝも可中日本乃一ヶ國ハ唐乃一線に不
及と朝鮮陣に立ゝ者て出にて御中ハ七ヶ
國大餘り大ゆるすに思ひゝハ手狭き御了覚と
奉ゆゝ五十九ヶ國をおもゝし手所斗を守る
位に成ゝて居ゝに可ゝ成ゝ某ゆゝハ其御ん

江にて駿府にて城江戸萬門若を八濱松に奉
居下御守殿を八大吉口御在陣を本多大勝にて
亜政也吉田に屯し池田皮にて備を堅くし扨
福嶋正則に達る御頼に城にて引ぬ家の勇士れ
きハ御味方下より中々たゞ何らハ正則也屋列清洲
を守り東海道を持続下中々上方勢責下り
て清洲の城を責ハ吉田て城か大勝にて亜政先
手をいゝし池田皮を浮陣にし浮邑を下仕
敵方若清洲を出し亜海上を廻りて岡濟吉田
を責ハ福嶋正則敵の浮を遮てお出にて

我々にて所浮か立挟て下お取味方ハ國殿近ふし
て兵粮に盡兵馬又に國上方勢ハ分國遠く
して粮道に兵家怠る処を迎に武ハ夜
討又父舅の謀を以て敵陣を劫し北ハ陣中
の歴みとなる處し然ハ其ふしにて百日扨ハ大概
二ヶ月をハふ下ることに京勝を手強くに押詰々
御使立下然々上方勢ハ何十万ヶ寺セ来りにても
大勝亜政両人にて請取中々にて勝家廣云地
の利害物かにて上々名姫是にるゝ事ふ
下を適き徳川の一人にて感し台にいへとも

京勝方をハ来義ゝ押へ下中ゝ言て進ミ出
者れし変ハ結城宰相秀康の庭の真中へ御
出る京勝ハ軍法正ま此ゝ御法し上杉勢の義日
本江双て極勇乃士多し此ゝ言ふ故誰かとも
重不出ハ秀康か仕合今津乃着到八万此中ハ実
謂てよし及兼ゝ秀康か手勢五千人を命を捨
損ふしゝ来も命ハ上ケ並ふし戦ゝて八万の京
勝勢四万ハ討取四万ハ手負此ゝ下ゝ恩召ゝ生所乃
果報ハ江戸真門ハ負ゝ云命掛乃勝負ハ立て
其徳門一門乃中ハ秀康を越ゝて武勇を下励

元ハ足れし今津口ハ御家を召ふ為まゝと遠
慮をれしてゝ仕ハ内府公当年三月か此ゝ
近ハ江て高笑と城其役義ハ此ゝ所ゝ此度
陣中乃大切ふ下るとて宇都宮城ハ出下ゝ与
む蒲生成三郎ハ秀康事和ハ自へし扨又今晩にも
白門口か謙信時代か手早紀上杉勢二万三万打て
此ゝ騒立ゝ軍勢去扨乃用ハ不下立
先ゝ押へを更合者れてハ明日近ハ家康当
所ハ尾ハ居へかゝて扨もゝ苦労ゝ事しか結
城か武勇ハ家康若盛ハ生ゝしゝ今川義元

討死之首五六里四方ハ悉く敵満ゝ今川方と
そハ大高城ハ東斗伯父乃小御坐列ヲ笑止かり
敵陣ハ居れかゝ案内者を付早引立と中送り
しかも今川家老乃諸父を立て退出りしハ
十九歳乃武功扨出ハ大高乃兵粮入同く退口の
手柄ハ東海道日乃出乃若者ハ伝長乃思ひ付
しハ其首ヲ取り家康ヲ子ハ右衛乃高名也
家若者れしハ常々悔ミしハ今日今日秀康
ヲ武勇ハ一門命綱他門乃軍誰ヲ其方ヲ先ハ立
者ゑらん外ハ弟の御自慢故結城殿ハも

御満足ハ今御坐を立て御出と城れから秀康
ヲ旗本ハ御定て取頂て七堂ハ京勝嫌ひ
ハ取りし処取頂七堂乃来ル取頂与市ハ右田
原口より味方引立ツ中を家援ケ意門御陣
宇都宮近家付しか早引立給ふハ安て小山ハ
走着しか馬をハ小山近くハ家倒し此今御所
乃柄子を窺れから結出結城殿乃御口上を安
ハ等しく立腹し京勝嫌ハ中ハ家康公秀
太御両所ハ安存ゝ白川口一乃先榊原康政
案内者ハしく来ル田原伝所守政清早一里

斗人数を撰出して所々林茂に伏立しかハ
立置たる子細を定けれハ康政も逃出し道にても御
逃上城る故我々も逃やらさる陣ハ引もなく切逃武者
を討切て為見届居候城中より早飛語せる者を
いかにして御近の子細ハいか中上より諸城放立れかふた
椋の本逃数奇の方へ定合てハ和まさ無ふものと
秀康古我京極方より来る花の合戦を定中
文ハ七枚志の外僅先定へられハ守赦安ハ下より来
いろく御意を仰しかハ外僅七騎急く守赦安
にいく立集り蒲生家に勢七枚志の勢諸城

を大将として其外赦合一万弐千余人ハ京極押へにて
定へハ為諸城放御武勇生けれハ京極押として
御立上城生ぶ記かく年々中勢を浦庄の真中より
進ミ出る中ハ我々(君)走政存念のもの共を飛りて
中上より鬼角京極方ハ上杉上方ニ歎を御退治
御免かゝ上方勢へことて京極より独り将軍城へし
先ハ最上かと定上出羽守義光大人数にて江戸へ
味方し岩手沢より伊達政宗是又其身大勢ニ
中ハ蒲生氏郷勢中の者人数も又寛亮の
兵多し越後にハ堀左馬秀次ハ大身にて坂

にあるけ三人余津を窺ひて京勝猛勇なるきハ
いとらくの斗乃手変万化出一人にして我も拝ふも
不可成又上方ハ石田三成に恐るゝにふ足いへとも
秀頼乃命と称して関御来下墨下を以て悉
顧乃大小名加勢せハ一日増に軍勢ハ如雲震集り可申
の運を天に任せるいハケ様乃時なるへし早く御
当家御譜代之面々を先手いとゝ成打て登らせ
給ふへし然ハ進むいふ処に他乃思分に勇ミ
敵きんあ大名ハ御倍をも仕御旗を守ふくと自然
いと出来可申の誓へ歓に百万騎あるに共上方へ乃御

先手ハ本多中務大輔大勝打破て御説に可入御旗本
乃大先手ハ御吉例乃井伊直政お勤んに分定大勝と
直政御先を仕ゝいくヤハカ勝ひて可並ひ一陣二陣其後
にとろくけにて麦飯を喰如くぜ語くと御利
運なるへし少く安くも源家中ハきハ公御安と成
おとふしやく年寄なきハ大事るとく軍立の法
甲斐に来力乃弱ふかられきハ之京勝表をハ結
城の慥に押へしけ上ハ上方へ打て登らん去れから
出ゝ近大事乃お談に原政の浅きなる事れハきハ
榊原数て帰着せん評定乃旨をふ申安先ッ武

知かて寄を安ゝ恒ゝと御家政おもゝしゝ待せ
らふ
然ハ小山乃城の大廣間ニ大小名乃諸ふ事疾明か
候ゝゝ此度乃御評定如何と伺出ゝ小ゝ我もゝ此
伺云し肩噬を吞んでゝ扣きハ本多体渡る正信一人
挨拶乃是也出席せ然き無誰あてゝ何きの筋かと
窺もたふく又存寄中出せ者もれし各眈三合せる
中にも池田三左衛輝政官位と云内府云聟せる故
各執成してたり乃上座せりしか本多体渡守に
ゝ問ゝくゝ中出ハ此度上方大変乃注進ニ有御陣中乃

騒動不及是非ニ臨事然ハ御上乃思召もあふへし
又大名中乃存念も可あるは其院と窺可然ゝ此上ハ
上方へ可登人掛乃充中もあらんすれり又内府云
乃御手成ゝ引充もあらんれきハ東西の分別急度お
立何きも安堵いたし度掛れりとゝ中出ハきハ本多
正信安ゝく池田彼乃御一云ゝ存ハ実寛この場にも
何ら以奉窺急くと中れから正信御前ニ発出大小
名所刻かお詰ゝ発出ゝゝ伺出事御座ゝゝ中渡ゝゝ
半ゝ窺ひけり
公安召ゝ持ゝきゝ此方乃可斗に取着しゝ大名中ニ

挨拶及延引ニ至リ何事も上方乃大変をよ受咲く
家を生らん事故大勝出座し可為挨拶ゆゑ
両人大廣間ニ出座ス時ニ御使ゆゑしゝ東條法印
（御出ニ付手今世言家）津田小平治（今ハ平左馬三千石）御口上ニ流ハ此度於上
方ニ石田治部少輔三成旗を上ケ関東下向ニ元中の
妻子方を取籠重ニ出名乃ん中葬入第止千葉
ふるゝ早くゝ日ヶ上方ニよ立御書子乃行目を
もん易く可よ致其上ニ於て石田方ゆゑ城ニ家康ニ
よ討ち先をよ取ゝ也も毛以眼法ニ上ハ一刻も早
く御治よ致ゝへ此度延引乃場ニ何ら以宮事ニ

登ゝ元中可ゑと存ゝ処法ニ義ハ備ん之立リ早く
支度可よ致家康義ハ追ゐ可任存念ニ也の事を
放し生ゑ御口上大小名一同ニハアト御請し互ニ
頼を思合生リ
池田三左馬輝政居生ゑ事を（スニト）立ゝ某ハ
家康方ニ雑遁孫ゝ以法ニ命同合御備意も
可ゑと本多中書并伊東政乃上座へ着座よ致
名方ニ此思ゝ通安居を可よ也とゐり其ハ
其跡ニ有リ乃上座福嶋左馬更正則加藤左馬
嘉明浅野左京更幸長田中兵部更吉政京極治

理事高知上系民部少輔義春右ノ上座ハ細川越中
守太興黒田甲斐守長政生駒讃岐ナル一正夜堂
作渡ナル高伴筒井伊賀ナル定次山内對馬ナル一豊
を始めし寃竟ノ大名廿三人其外場員を踏ミ
ナルニ武功ノ小名五十八人也隣座ノ耳ヘ耳ヘ小
声ノ相談指ハ書ナリ呼ぎ出リ此処を捨
て上方白登ニ時ハ武道ニテ義ハ廃ナリ扨内府
ノ味方ニ何きハ上方ノ書子人質を捨ニも伝
義を背く恐れ有らん角ハ直しからん持ちかく
思ひしノ不寄合匹く成ニ成ニ夜堂作渡ナ

ら中出ハ急ぎれからは宦名ノ思ひ難分ヶもむ候古
今共に武士ノ名を後代に残しと笑孤辱もと賞
名誉もケ程ノ宦ノ一言ナリ此以書子可也ハ
ハ此家康公を奉捨て逃登らハ武士道ハ次へ成て
書と執着と子共ノ恐也に引ると嬌弱ノ人間ニ
地合ノ男ハ為て此分之書子をも振り捨て内
府公ノ御手ニ引き此を不捨ハ勇士ノ本意と可
謂宦に餘ミ義ニ不義ナリ二節ニ同云如斯サア何
きれり此も御重しやく此書子を捨兼上方
へ登きハ武士ノ立ぬ此ニ云ナ成明白に云出し

登けぬ積りの云ひし相云ひの云事徒者ありし
誰も未だ羽を不發之処細川越中守太兵こるく
ゆゑ殿中しハ是義不為ハ云曾之ゆゑ唐人ハ武官
の者ハ義を旨ゆゑ以制作日本義の國に生まし
雪士ゆゑ唯るゝ面々の義を捨武士立人ハ誓へハ
石田三成ハ敵と此ゑに足らぬ天魔鬼神に妻子
をゝ奪又生捕及縄ニ明日於軍門処足に載らき
生砒に自らるゝ云捧ハ十七歳細川越中守太兵内
府公の御味方ゆゑ居長ヶ高に成て中ハ御ふきハ夜堂
高所幸之ゆゑ打知ひ砒霜斑蝠ゆゑ知て毒味を

ゝ成ハ神妙ゝ高所ハ菓嫌ひの毒物喰いけお体
ゆゑ太兵ゆゑ一所に立て并伊本多両人ゆゑ痩を並
ふ池田輝政完ゆゑ知ひいか格是ハ痩成作り内府
公ハ味方ハ十ひ方の例ゝ登元ハ何のち例ゆゑ究ゝ可然
ゆゑ各細川藤堂池田の三人ハ水際立て引分ふ次
に各婚し云云是ふ処上系民部少輔進ニ出て
ゝ中ハ各方御相諭も一理あり人笑の妻子を捨
教ゆゑあらんハ此兵の更義難遁故ありし然ゆゑも
夜に同し格ゆゑ節目にも神ゆゑ社と正月別あり
元来諸大名の妻子を上方に御し並ハ若遠國に

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

逆徒起るの旨一味けせまし紀を始め天下國家
の諸侯の禮然者京勝口ゟ下面く書を添に並も
京勝ゟ一味ゟ謂ゝ擬ゝり然る処を逆徒退治
に討ちに向し味方の大小名ハ何の科ゟ石田方
口横ゟりの人質を下ゟ入ゟ謂ゝ度ゟ三成の不義に
しゝ何まもの比興に何らゝ石田ゟ其ゟ言ゟ人質
を横ゟりし丈ゟ味方に引込ゝ是ハ軍門の比興ハ
上ゟ不可ゟ中悪紀事れから思ゝ弓矢の式と云
賞ゝ不識説謙信ハ人質を取並せる幕下
の士に中分ゟ云ゝ弓矢に及ぶの旨ハ急度人質

を送り返し其後合戰に及ぶ事是を雪将雪
士ゟ中然ハ比興ハ石田方にゟ云ゝ何まも方にハ
卿も云ゝけ上ハ御思案可に可ゟ云ゝ早く内府
の御手をゝ引ゝ當ゟ武士の三ツ及具ゟ
信ゟ義と禮を御守りゝ未代迄の美談ゟらん
と流石ハ謙信の甥祖ゟ云ゝ雪士の節同をゝ遊ゟり
黒田長政浅野幸長同ゟ同を思合武士及の意
地ゝ云ゝ是ゟハ親兄才書子一門を鏖に遁と
ゝも日本國中の武士に負ん是ハ不存ゝ我ゝをも
能ゝ男の中に入まゝ強まゝ黒田長政ハ池田輝

段乃浮ヒ足リ腰毒をさしきくり其ヲ入らき
ハ不浮御方家ニ更ニ細川誠中守ニ浮から右具
を示ヒ突出しサア強ひ男ニ成ヒ其ヲ戯れから
着座せり
福鴻方恵ニ更ニ別ニ一人放き者乃如く成しかハ
大ニ腹立日本ハ不及中ニ朝鮮迄押渡ツテ生死一
所ニ繋リ生ニ何きも思苦し一分ヽ乃身構へ
ニ更へ仕方ハ能ニ法座ニ来をハ迄らきよ係正
別ヲ心座ハ池田法法なるへし何きも方より
迄乃美ニ急度御為ニ成ニ味方下仕東海道へ

内府御旗を進めらまんニ服所之来居城乃清洲
をハ悉く明渡し御本陣ニ仕正別ニ御法を使
草ニ那御先手ニ成可致只今ヲ能ひ男ヒ所中其内
府公石田ヲ勝負究メラ御一戦ニ出一番合戦ニ
福鴻方恵ニ更ニ別之思らく那へ渡せ海し何と
上方ニ登ニ元をハ引ツ立て座ニ座ニ掃除を法
法ハリ然いてし軍評定いふ事を通しいかにくと只
今板屋兄頼魂お残ニ元中一同ニ何ヲ扨一人と
不残家康公御味方妻子ハ捨てヲ御味方と吐と
中せハ小山乃城中家来ヽも静りハリ御使乃東

條法印案り乃事の姉しけれ一人出し御所へ出
しか数居に仇寄物ゆしかハ廣間乃とよミハ何事
持ひ〳〵御尋ゆしに東條法印ハ膳を出り
出已し二痛す乃案りにかれし御声しく諸大名が
〳〵ゆゑ云々屁数か少へ兼し故味方をせぬかと
御声をゝ掛し処法印少持ん〳〵ハアトゝ言し其
時は家康公も汚御言御立ゝ成実かく輝政
斗は左も何らし〳〵御名ゆ聞り生る処ゟ大廣間
より内府公御所ゟ池田三左馬友堂伴度守を想
名代ゆしそ并伊本ゟ女御披露にそ此度御供乃

大小名不残御味方ゆゑらゆ上しかハ家康公ハ二度
ゆつくり〳〵輝政持ち斗か大名共ハ能に高に立
く〳〵御立掛りゝ故輝政は高伊成法しかまハ其
友堂高虎実立上り例て粗云掛りに大音上ヶ神ゟ
八幡大名共はふ及中に其節冠者足怪今案りの中
乃近も不残御味方ハア御目出度ゆゑなゝと孫の
郎御機嫌能法印は何事を中生ふ持家康
既に正家を先ふ根成しゆゑらゆしかハ東條法印
起上り諸大名乃御味方案り姉しく奉好物ゆ中
ゑ簾おそ脱御色丁ゟ印ゆゑらゆ上しかハ早速御

機嫌走り御座に着せ給へハ弁伊豆政披露別而
福嶋の事清例乃居城を明て御本陣を下奉居
と迄乃御大臣名曇り御紀御味方乃御吉事ハ上
不可ゆとゝ中上しかハ下御守大吉朝臣を為御名
代ト大廣間にゝ名ハ臣乃合力満足ゝゝと御渡足座
に御盃をゝ出御相て処三方惠輝政御御しゝ号ゝ中上
て越中守方にてゝ名ハ丈ハ候て御名代
御契約乃御盃ハ下御守皮ゝゝゝゝゝ姫孫輝政御
御しゝ引れり但しハ臣乃御盃乃次第表座ゝ
ハ家康公駿河御居所ハ御吉例ゝゝ成れり御拝

八十三人に御御しゝ成丈ハ順逆乃酒豪悟しゝゝ
細川越中守　兵乃交り頼ゝゝ中乃酒豪ハ
謡ゝ納しを福嶋正則ハ他乃武功を持ち祝む生き
故ハ我ゝし故ハ高ゝゝ　兵乃交り我祖頼母ゝ
ものハれしゝゝ謡きしハ幸代乃我ゝし大名
れり
小山城中上下乃騒動ゝしゝゝ止ゝて悦ひ勇みしそ
不思議なりき此今両口何祖制しても下ゝ騒動
ゝ止しハ三れ上ゝ上ゝ主人ゝ乃心ゝ定故ゝゝ
速く止り

然ニ処柳原原政ハ廿五日来ノ下刻小山ニ着と写ス
息を切リ候ハ御所ニ出しか家原公ニ御所ノ元中
へ御目砲ニ成原政ハ只今ノ軍義定リ上方の大
変危しく依て第根を大手ノ要害ニし長く関
東ニ下ノ竜評定一変し上リ此御意も不終ニ原政
大音上ケ腰ノ抜ケ上ニ腰病者ノ下ノ寄何者か中出
しニ御上方ハ大敵ニ思へて弱敵ニ然其病の根
ニ於て御中ニ景勝ニ強敵ニ候ハ病ノ枝ニ御疱ニ早
ニ打て登リ美濃屋張ノ間ニ於て遂二戦ヲ天下
て安危を御究下ニ成ニ途中ニて結城殿ニも通リ

候ハ掛御目ニ結城殿ノ御意ニ我年津口ニ押ヘ来
れり京勝百万ノ勢上リ其宇都宮ノ江戸ノ方へハ
一人も無御ぬ故ニ御所ニ成ニ御武勇ノ上ニ御所
ノ御着盛生ニしニ御中ニ御先手を上ニ登ニ事延
引ハ家原ニ於年老上方ノ大軍ニ安怖しく
居本ニ候しニ諫おハ上方ノ国ニ不堅へハ御
味方ニ此なニ元中も逆寒ニて走着事ニ下成早
竟居負ニ中ニ下成ニ上方ノ大変を御安ニ成始終
を御考実東ノ御分国ニ御楯竜ノ為ニ此ハ千
万人ノ思案一同成ニへし故こを引遠不日ニ御勢ニ

ゝ尚ゝ以て弱歟云所を潰し都て歟乃弓矢本ニ
丁中構へ候しかれ御臆病者の方御に御見
中ゝ候も御用ゝ成る事ゝヤレ〻〻実根を大手ゝし
実東に籠らん事ハ能もし所乃腐き生ふ臆病
者ゝ以て中ハ其ハ弾の御御機嫌能原政也之臆病者
也如何せん其方を示ゝ候ゝ以て腰抜呉也に可希物
を惜き奴之事ゝ仰し成原政問きハ不ふ臆病者ハ
軍所ニ障り御追放く事ゝ中ハ其ハ江戸黄門ハ
実止に思召こゝ事ゝ仰ゝへハ家原公御実ゝ成其臆
病者也御ゝハれし家原しや事ゝ仰ハ其ハ原政

所を潰し中書能く言せて安て居ゝ事ゝ云御壹
訓追ゝ逃しとゝ
早ノ上刻御膳をゝ召上并伊本多榊原を始三河
御譜代乃元中ゝ召出御両豪ゝ召りしか御盃乃納ハ
黄門秀君御ゝ家原公　兵乃交り頼也中乃酒
豪小と同音に各奉次頃来に御大廣間にも御使
ゝ召ゝ明早天ゝ軍評定ゝへしゝ晩ハ各体見ゝ
ゝ以ゝのゝ仰出ゝ退出し早
六五日卯乃下刻想出仕乃上ゝ日也表御座ゝ両
御所様御出大小名白御對面ゝ上ゝ仰出ゝハ早ゝ当

表ハ引拂ひ江戸ニ御馬を下ス又ハ其の義ハ諸大名御たうよし兼ハ重祐ハ御出ハ若ハ君上松京勝切ハ出頭を慕ハ御結城ハ何程武ハ御振ひ云上杉八万ハ格ハ不下勝討死せんハ必定也尚又京勝表ハ御評定何らん也ハ其の大小名へ御料理ニ下御付御菓ハ荒布ハ煮物一汁一菜御吉例也

朝御膳ハ宮殿家ハ蒲生家ハ家老蒲生源左衛門窺御持嫌也しハ其出ハ御目見ニ上ハ安ハ御度ハ上方大変命律ハ企敵ハ実東節の

利害損益ハ残ハ座を中上ハ恒也ハ蒲生源左衛門ハ天下ハ名を和也ハ勇士ハ兵ハ行後見しハ武功ハ者ハ其ハ少しも其憚中上ハ御抑ハ度ハ義ハ御苦労ハ事ハ其ハ御命律ハ其ハ御ハ上方ハ乱ハ根元也ハ是ハ逆向ハ義也ハ其ハ京勝ハ方を先へ記ハ其元ハ石田三成ハ籠ハ上ハ恩ハ者其ハ御也ハ其上命律ハ格子ハ也し兼ハ庶ハ処京勝ハ本ハ逆意ハ何ら御理斗を嗜ミ一家中ハ仕面を東江山城守一人ハ御故早竟ハ張本京勝

御居物にて直江山城なるべきお迎へ中ゝ此方より
御攻ふ城ゝいく京勝かおそく出中るまかと推察ふ仕
ゟ既に明日か上杉方軍ニて支度悪く中途へ張り
出しゝ勢を以てゝ御当家御引拂乃先手へ押掛て
切り崩しゝいく余程御難義乃処を不和京勝にハ
其所ゝ急角御路の義ハ少しも御構御上洛ニ
候御をにも存ゝ万一京勝おそく出ゝ中ゝいく結城殿
をハ宮越宮城に奉居ゝ若輩ゝから秀行を伴ひ
源左衛門先手に進ミ上杉出をハ第川か南へハ一寸も
越ハせ中るまじく言葉源まゝ中上しかハ家康公御

機嫌不斜其方に談合せハ大形其方か意量左右
に談合すへ御ゝなくり然ハ結城を残し直る万
事所入ゝ御ゝ如ゝ結城宰相秀康ゟ御ゝ
京勝押へ乃へくハ

蒲生度三郎秀行 十八万石 里迎安房守義康 十一万石
佐野略理吏伝吉 三万石 佐野城主
天徳寺菅子実ゟ留田左近将監ニ二男也
六人兵庫介 二万石 水谷伊勢守 伊勢館
右ハ七堂旗乃ゝしらく
右ハ御与の市

福原内通

特 3
特別
1

太閤秀守　芦野左門
伊王師形部　大吳太伝守

泉陳代知台二万八千万勢を以て宮知宮に殘
京勝押へ候り先達て結城殿ハ宮知宮に御越
御座と成る故御使者ゆしく松平玄蕃允家清を
ちきしれり

日本一統志七十一終

藏書之記
幸田氏
浜巣村

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『日本一統志 155巻』 請求記号 862-160

ガラス使用